観察（みる）

地域農業再構築のための基本戦略

研究所長　七戸長生

近年しきりに地域農業の振興とか、地域社会の活性化といった形で「地域」という言葉が強調されるようになったが、その基本的なねらいはどこにあるのだろうか。恐らくそのねらいは多方面に亘っていて、とてもひと口では言い現せないと思われるが、あえて言えばそこに住む人々の行動範囲が大きく拡がり、かつてのように共通の利害・関心を軸にして結集した「まとまり」が失われてきたという現実認識が、その根底にあるように思われる。つまり、近年の社会経済的な変動は、そう簡単には変わらないように見られてきた既存の農村の構造を大きく変化させ、そこに住む人々の活動の範囲を著しく拡大させた。そればかりでなく、お互いの価値観が驚くほど多様になり、旧来の市町村や単協の下に結集してきた住民の同質的・等質的なまとまりが失われて、このままでは新しい社会の動向にとても対応しかねるのではないか、過疎化や混住化の進行の中でムラが崩壊してしまうのではないか、という危機感を募らせるようになった。そこで、従来の市町村や単協が領域としてきたさまざまな農村活動の「ひろがり」や枠組みを思い切って捉え直して、どうしたら人々の活気溢れる「まとまり」を取り戻すことができるか、どうしたら都会の人々にも共感を呼ぶような活動の「ひろがり」を確立できるか、という観点からの問題関心が、「地域」という表現にひき寄せられることになっているのではなかろうか。

もしそうだとしたら、私達の問題意識の根底には、地域農業をいかにして再構築すべきかという明確な戦略構想を早急に樹てなければならないという切迫感があるといってよかろう。戦略構想などと言うと、自治体の首長

や単協の理事者などの専決事項のように思う人がいるかもしれないが、決してそうではない。間違った戦略の下でひどい迷惑を蒙るのは、いつも末端の住民だからである。

では、その戦略構想のポイントに据えるべき中心課題は何だろうか。

その第一は、優れた人材の育成・確保ができる地域のまとまりを考えることである。それも三人、五人といった少人数ではなくて、十人、二十人といったグループの形成が重要である。こう言うと、ただでさえ農家の後継者がいないと言われている時に、そのようなことは不可能ではないか、という反論が予想される。しかし、これからの時代に求められているのは、農業が大好きで専門的な技術・知識に優れているばかりでなく、他産業の人々とも互角に議論ができる高度の見識を身につけており、消費者の関心も十分に理解し行動できる「全天候型の戦闘能力」をもった人材であって、これを特定個人に期待することはとうてい無理である。そうだとすると、三人集まれば文殊の知恵の諺通り、多くの個性、多くの特技の人材を、十人、二十人と集めて、チームを組んで頑張ってくれるように、地域の人達が協力し合って鍛え上げていくことが必要になる。旧来の町村や単協のひろがりでそれが不可能であるとしたら、何らかの策を講じて広域的な対応を採らなければならない。自治体や単協の広域合併の重要性もこの点につながっている。

第二に挙げたいことは、このような広域的なひろがりの中で、住民同士がお互いに技術的にも、経済的にも、より良いもの、より楽しいことを求めて学び合い、励まし合うという雰囲気を昂揚することが、ムラ全体の独自の文化の創造につながり、ひいては都市に住む消費者に向けての、その地域特有の明確なアピールの発信源となっていくという点である。つまりムラ全体がすべての人にとっての学校のようになってお互いに学び合い鍛え合うという気風を築くことこそ、そこを訪れる人々の心を打つ「ふるさとの良さ」をしみじみと訴えかけるセールス・ポイントの核心であり、過疎化や混住化による衰退の懸念を一掃する最大の方途であると考える。若者ばかりでなくお父さんもお母さんも、それぞれの持ち場を手始めに各自の生活をより良く、より楽しくするための工夫と努力を惜しまぬことが、今日ほど求められていることはない。